

シェリングにおける神と自然過程

浅 沼 光 樹

シェリングはその思想的展開の最終局面である所謂「積極哲学」の時期の諸講義において神による世界創造について論じている。この世界創造論は彼が補足と改訂を繰り返しながらも己の哲学体系の一部として保持し続けた「自然哲学」（「自然過程」の叙述）の最終的な根拠づけと見なすことができる。すなわちシェリングはこの時期に「自然過程」を神との関係において、単なる自然界の産出過程としてではなく、より広い視野のなかで神による自然界の産出過程として、つまり神による世界創造の過程として把握しなおしていると見ることができる。本論文はこのような観点から「積極哲学」の時期に定位し、神との関係における「自然過程」ということを問題として取り上げ、シェリングが「自然過程」を神との関係においてはいかなるものとして思惟しているのかを明らかにすることを目的とする。その際に「自然過程」の叙述の内にとどまる限りでは明らかにならないその根源的相貌が有効に描出されるように、「自然過程」の本質的構造をまずそれに内在的な見地から見ておきたい。シェリング自身が同じ時期に本来の体系の予備部門にあたる別の講義においてこのことを行っている。次いで「積極哲学」の時期の諸講義の中から、それが最も詳細であるという理由により、オリジナル版全集に収められている『啓示の哲学』を選び、そこでの世界創造論の内容を凝縮して呈示することを通して本来の課題を果たしたい。

I

「自然過程(Naturproceß)」とは自然界の産出過程の謂である。最も具体的な相において見られるならばそれは時空と単なる質料に始まり非有機的物体界を経て有機的生命の世界へと至り人間の意識において完結する過程である(Vgl. " Darstellung des Naturprocesses " 1-10-301-390)。しかしこの「自然過程」はその本質において見られるならば「実在的なもの(客観的なもの)」の「優勢」から「観念的なもの(主観的なもの)」の「優勢」への進行である。つまり「自然過程」とは「観念的なもの」に対する「実在的なもの」

の決定的な「優勢」という始めと「実在的なもの」に対する「観念的なもの」の決定的な「優勢」という終わりとの間に展開される「観念的なもの」が段階的に「実在的なもの」に対して「優勢」になっていく過程である。それ故「自然過程」の系列の内には単なる「観念的なもの」とか単なる「実在的なもの」というようなものは現れない。この系列は「観念的なもの」と「実在的なもの」との両面を持つもの（それ故単なる「観念的なもの」でも単なる「実在的なもの」でもないもの）から構成されているのである。しかしより一層根源的な視点を採り原理という観点から見ると、このような本質を持つ「自然過程」は次の三つの原理の所産として把握されている。第一の原理は「自然過程」の系列の内に現れるものの基体の役割を果たしている「実在的原理」と呼ばれる原理である。「自然過程」の系列の内に現れるものの基体は単なる「実在的なもの」であるとされる。「自然過程」においてはこの単なる「実在的なもの」は既に他の原理の作用を被ることによって何らかの程度において「観念的なもの」として現れ「自然過程」の内へ純粋なかたちで現れることの決していないものである。したがってここにこの単なる「実在的なもの」を「観念的なもの」へと転回させ「実在的なもの」の内へ「観念的なもの」を定立することによって「自然過程」の系列の内に現れるものを「観念的なもの」と「実在的なもの」との両面を持つものとする他の原理が考えられる。それが「観念的原理」と呼ばれる第二の原理である。そしてさらに第三に「自然過程」において実現されるべきものが過程全体を導いていく目的の原理として考えられている。「自然過程」はこれらの三つの原理の所産として上述の本質を持つ過程なのである（Vgl. "Darstellung des philosophischen Empirismus" 1-10-225-286）。

「自然過程」の本質的構造はそれに内在的な見地からは以上のように要約できる。このような構造を持つ「自然過程」は、それが神による世界創造の過程として把握しなおされることによって、いかなる姿において現れてくることになるのだろうか。

II

1.

シェリングの考える世界創造以前の神の存在の本質は「孤独なもの」（2-3-260）という言葉に端的に表現されている。神の存在は自分のこの存在以外のものを持たない存在である。しかしこのことは厳密な意味で受け取られていなければならない。それは自分のこの存在以外のものを現在持っていないというだけではなく、以前にも持っていたこ

とのない、つまり自分のこの存在以外のものを前提しているということもない存在として考えられなければならない。もし神の存在が自分のこの存在以外のもの、つまり別の在り方を前提し、それを否定することによってこの存在へと到達したというのであるならば、それは自分のこの存在以外のものとの必然的関係のうちに置かれるからである(2-3-263)。自分のこの存在以外のものから解き放たれているという意味において、つまり「あらゆる関係ないし結合から完全に自由である」という意味において神の存在は「絶対的(absolut)」な存在である(2-3-261)。

2.

神の「絶対的」存在はその内的構造に関しては「一様で空虚な」ものではなく「分枝化された、自己自身の内において多重であると同時に一重な」ものであるとされる(2-3-238)。神の「絶対的」存在が「多重であると同時に一重」であるとは神の「絶対的」存在が、ただしあくまで全体としてのそれが複数の規定を持つことを、いわばそれが複数の姿、「形態(Gestalt)」において立ち現れていることを意味している。したがってこれらの複数の「形態」は、それらが全体としての神の「絶対的」存在の複数の規定であるが故に、この存在の一部分に割り当てられうるようなものではなく(2-3-239)、むしろ三つの「形態」はこの存在において同じ場所にあり、この意味で「相互内在的(ineinander)」に統一されているのである(2-3-238)。

しかし神の「絶対的」存在は無限定に複数の「形態」を持つのではなく、それはただ三つの、ただし一定の位階において考えられる「形態」を持つものである。しかしこの位階は時間的前後関係を意味しない。つまりたとえ或る「形態」が他の「形態」の後に続いて生じ、そのようにして神の「絶対的」存在が三つの「形態」から継起的に合成されているのではない。そうではなく神の「絶対的」存在の三つの「形態」は一挙に定立されているのである(2-3-258-259)。それにもかかわらず一挙に定立されている三つの「形態」は前段階の「形態」無しには考えられず、この意味で第三の「形態」は第二と第一の「形態」を前提し、第二の「形態」は第一の「形態」を前提しているのである(2-3-237)。

神の「絶対的」存在の第一の「形態」は単に「an sich」に存在しているそれである。「an sich」に存在するとは「内面的(in sich)」に存在することを、ないしは「中心的(zentrisch)」に存在することを意味している。しかし「内面的」に存在するものは同時に外化しうるもの、あるいはシェリングにとっては同義なのであるが「潜勢」から「現

勢」へと移行しうるものでもある。このことを顧慮して単にという語が付加されている。すなわち第一の「形態」における神の「絶対的」存在は自分に「外面的」存在を与えない限りでの「内面的」存在、「現勢」へと移行しない限りでの「潜勢」という意味で単に「an sich」に存在しているものなのである(2-3-251-254, 257)。

神の「絶対的」存在の第二の「形態」は単に「für sich」に存在しているそれである。第二の「形態」は第一の「形態」とは全く逆の規定を持つ。それは単に「外面的 (außer sich)」に、あるいは単に「脱中心的 (exentrisch)」もしくは「周辺的 (peripherisch)」に存在しているもの、つまりその内に「内面的」存在を持たない単なる「外面的」存在、「潜勢」を持たない単なる「現勢」である(ibid.)。神の「絶対的」存在の第三の「形態」は「bei sich」に存在しているそれである。第三の「形態」はそこにおいて第一の「形態」と第二の「形態」が不可分に統一されているもの、不可分な仕方で両者であるようなものであり、その限り単に第一の「形態」でも単に第二の「形態」でもないものである。第三の「形態」は「外面的」存在であるが、つまり外化しているが自分の「内面的」存在を喪失せず、自分自身の元にとどまるという意味で「bei sich」に存在するものと呼ばれている(ibid.)。

要するに神の「絶対的」存在は第一の「形態」において単なる「内面的」存在なのであるが、この「形態」を基礎とすることによって、つまりそこに己の「内面的」存在を（それがそこから外に出ているところのものを、或いはそれがそれに対しているところのものを）補うことによって第二の「形態」において、その内に「内面的」存在を持たない単なる「外面的」存在として自己の外へ出ている。しかし第二の「形態」において自己の外へ出ている神の「絶対的」存在はこの「形態」にとどまっているのではなくて、さらに自己の内へと還帰していることによって第三の「形態」において単に第一の「形態」でも単に第二の「形態」でもない全体としての自己として存在しているのである(2-3-257)。

3.

神は神の「絶対的」存在において「相互内在的」に統一されている三つの「形態」の「前・超物質的統一性(vor- und übermaterielle Einheit)」(2-3-241)であるとされる。このことは第一に神は三つの「形態」の「統一性」そのものであって三つの「形態」の他に存在する何か別の或るもの、第四のものではないということを意味している(2-3-259)。しかしさらに第二に神は三つの「形態」の単なる「物質的統一性」としてではな

く「前・超物質的統一性」として考えられている。このことは神は三つの「形態」の「統一性」そのものであるが、神がこのようなものであることは神の「絶対的」存在において三つの「形態」が「相互内在的」に統一されていることに制約されるものではなく、反対に神の「絶対的」存在において三つの「形態」が「相互内在的」に統一されていることは神が三つの「形態」の「統一性」であることの帰結にすぎないということの意味している(2-3-270-271)。したがって仮に存在において三つの「形態」が「相互内在的」に統一されていないとしても、そのことは神が三つの「形態」の「統一性」であることに些かの影響も与えず、神は三つの「形態」の「統一性」であり続けるであろうし(2-3-268, 270)、このことによってさらに存在において三つの「形態」が一つの場所にあることを強制し、存在における三つの「形態」の「相互内在的」な統一を帰結せしめるであろう(2-3-280)。この意味で神は三つの「形態」の「単なる存在の面からの」「統一性」ではなく「本性の面からの」「統一性」(2-3-268)として「超物質的な、まさにそれ故に解くことのできない統一性」(2-3-280)なのである。

III

1.

前節においては世界創造以前の神の存在が自分のこの存在以外のものを持たない、つまり必要としない「絶対的」存在であることが確認された。それ故またそれは自分のこの存在以外のもの、別の在り方を前提し、それを否定することによってこの存在に到達したのではなかった。しかしシェリングによれば神の「絶対的」存在そのものにおいて別の在り方の可能性が描きだされているのである。ただし神の存在が自分のこの存在以外のものを必要としない「絶対的」存在である限り、この可能性は「ただ排除されえないだけのもの」として、つまり神の「絶対的」存在にとっては必然的なものではなく、むしろ偶然的なものとして描きだされているのである。しかもそれは単に描きだされているにすぎない。つまりこの可能性は現実に定立されない限り「無 (Nichts)」であり、いかなる実在性も持つものではなく、実際に定立された場合にのみ「あるもの (Etwas)」となりうるようなものなのである(2-3-263-264)。それはいかなる実在性も持たないものとして神の「絶対的」存在における単なる「現象」である(2-3-268)。

2.

別の在り方の可能性が神の「絶対的」存在において描きだされているのは神のこの存

在の三つの「形態」が別の存在を構成する同数の可能性として見られることによってである(2-3-264-265, 267)。しかし忘れてはならないのは、別の在り方の可能性が神の「絶対的」存在における「現象」である以上、別の存在を構成する可能性としての神の「絶対的」存在の三つの「形態」というのも、いかなる実在性も持たない単なる「現象」であり、それらは現実にはただ神のこの存在の三つの「形態」としてのみ存在しているということである。

神の「絶対的」存在においてその可能性が描きだされている他の存在とは神のこの存在において「相互内在的」に統一されている三つの「形態」の「相互外在的」な「不和 (Spannung)」における存在であるということが出来る。しかし三つの「形態」の「相互外在的」な「不和」における存在といっても、それは単なる静的な分裂状態ではありえない。というのは神は三つの「形態」の「前・超物質的統一性」としてこれらが存在において一つの場所にあることを強制し、存在における三つの「形態」の「相互内在的」な統一を帰結せしめるだろうからである。したがって三つの「形態」の「相互外在的」な「不和」における存在とは、それを通して三つの「形態」の「相互内在的」統一が回復されるような、しかもこの運動のなかで神の「絶対的」存在においては「相互内在的」に統一されていた三つの「形態」が互いに区別され「相互外在的」に現れてくるような、そのような力動的な「不和」として考えられるべきもののなのである。つまりそれは「抵抗によって妨げられた、しかしまさにそれ故に自己の諸契機において区別されうる、概念把握しうる現勢、要するに過程」(2-3-277)に他ならないのである。

「過程」の直接的可能性は神の「絶対的」存在の第一の「形態」である。それは単なる「内面的」存在である限りにおいて三つの「形態」の「相互内在的」統一の、それ故また神の「絶対的」存在の「根拠」であった。しかしこのようなものであることを止めて自分に「外面的」存在を与えるならば、それは今度は三つの「形態」の力動的な「不和」の発端となる。それは「排除的に」作用する。つまりそれは「現勢」へ移行することによって存在を独占し、他の「形態」を存在から「排除」し「潜勢」の状態に定立する。しかし本来は第一の「形態」は「現勢」の状態においてではなく「潜勢」の状態において存在するように定められたものである。したがって「現勢」へと移行した第一の「形態」は存在すべきでないにもかかわらず存在しているものということが出来る。そしてこの存在しているが本来は存在すべきではないものという意味においてそれは「存在すべきでないもの」と呼ばれる。それ故第一の「形態」は「過程」を構成するものと

しては、その直接的可能性＝「直接的に存在しうるもの」にして「存在すべきでないもの」である(2-3-265-267, 278-279, 284-285)。

「過程」の第二の可能性は「存在すべきでないもの」によって「潜勢」の状態に定立される神の「絶対的」存在の第二の「形態」である。第二の「形態」は第一の「形態」に己の「内面的」存在を補うことによって自分の内に「内面的」存在を持たない単なる「外面的」存在であることができた。しかし第一の「形態」が「現勢」へと移行することによって第二の「形態」は自分の「内面的」存在を補ってくれるものを失い自分の内に「内面的」存在を持つように強いられる、つまり「潜勢」の状態に定立されることになる。しかしそれは「潜勢」の状態に定立されたとしても単なる「現勢」であることを止めることができない。つまりそれは「存在すべきでないもの」を再び「潜勢」の状態に定立することによって自分を単なる「現勢」の内に回復しようとする。それはこのような作用へと定められており、その限りそれは「過程」においては働くか働かないかの自由を持たず、必然的に働かなければならないものであるということが出来る。この意味でそれは「存在しなければならないもの」と呼ばれる。第二の「形態」は「過程」を構成するものとしてはその第二の可能性、第二の「存在しうるもの」にして「存在しなければならないもの」なのである(ibid.)。

「過程」の第三の可能性は「存在すべきでないもの」によって第二の「形態」と同様に、ただしこれよりも深い「潜勢」の状態に定立される神の「絶対的」存在の第三の「形態」である。第三の「形態」は第一の「形態」が単なる「潜勢」にとどまり、三つの「形態」の「相互内在的」統一の「根拠」である限りにおいて存在することができた。しかし第一の「形態」が「存在すべきでないもの」となり三つの「形態」の「相互内在的」統一が破壊されることによって第三の「形態」も存在から「排除」され「潜勢」の状態に定立される。ただしこの「潜勢」の状態は第二の「形態」が定立されるそれよりも深い。というのはそれは「過程」の最後に、つまり「存在しなければならないもの」が自分を単なる「現勢」の内に回復するときに、「潜勢」の状態に連れ戻され再び三つの「形態」の「相互内在的」統一の「根拠」となった「存在すべきでないもの」によって定立されることになるからである。しかし「過程」の最後に定立されるものはその目的ということが出来る。この「過程」の目的という意味でそれは「存在すべきもの」と呼ばれる。それ故第三の「形態」は「過程」を構成するものとしてはその第三の可能性、つまり最後に「存在しうるもの」にして「存在すべきもの」である(ibid.)。

別の在り方の可能性が神の「絶対的」存在において描きだされているのは神のこの存在の三つの「形態」が別の存在を構成する同数の可能性として見られることによってであった。しかし三つの「形態」の力動的な「不和」における存在とは「存在すべきでないもの」の出現に始まりこのものの「存在しなければならないもの」による否定を経て「存在すべきもの」の実現に至る「過程」に他ならない。それ故このような「過程」の全体が、神の「絶対的」存在の三つの「形態」が「過程」を構成する三つの「存在しうるもの」として見られていることによって、この存在そのものにおいて描きだされているのである。

3.

神の「絶対的」存在において描きだされている三つの「形態」の力動的な「不和」の「過程」の「現象」は次のような二重の意義において神にとって「好ましいもの」(2-3-268)であり「楽しみと決して止むことのない喜びの対象」(2-3-274)であるとされる。

第一にこの「現象」は神に「自分に気づく(sich innewerden)」ことを可能ならしめるという意義を有し、この意味で神にとって「好ましいもの」であるとされる。「自分に気づく」とは自分が三つの「形態」の「前・超物質的統一性」であることに気づくということに他ならない。つまり神は三つの「形態」の「不和」における存在が自分にとって可能な在り方として示されることによって自分が存在において三つの「形態」が「相互内在的」に統一されていないとしても三つの「形態」の「統一性」であり続けるものであることに気づくのである(2-3-269)。このことは簡単にいえば神が自分が存在に拘束されていない「自由」なもの、それ故「絶対的」存在と三つの「形態」の「不和」における存在という二つの在り方が「どちらであっても構わない(gleichgültig)」ものであることに気づくということを意味している。つまり神は自分を神の「絶対的」存在から自由なものとして見いだすとともに(2-3-268)、自分が三つの「形態」の「不和」における存在に対しても自由なもの、それを定立しうるものであることに気づくのである(2-3-269)。それ故ここにはこの存在を「欲することができる」もの、つまり「意志」としての自分に気づくという意味も同時に含まれている(2-3-268)。すなわち神は自分が存在から「自由」であり、二つの在り方が「どちらであっても構わない」ものであるが故に、どちらの在り方であろうともそれを「欲することができる」ことに気づくのである。シェリングによれば神の名は自分に「私は自分が成るところのものに、すなわち自分がそれであろうと欲するところのものに成る。このものであるか他のものであるかは私の

意志にのみ依存している」と言いうるものにのみ相応しいのである(2-3-269-270)。

第二にこの「現象」は神の内に「認識」(2-3-274)を生ぜしめるという意義を有し、この意味においてそれは神にとって「楽しみと決して止むことのない喜びの対象」となる。「認識」とは「自分をその様々な形態において分離し区別すること、あるいは自分を様々な形態の各々において特別に定立し認識すること」(2-3-273)を意味している。しかしこのことは三つの「形態」が「相互内在的」に統一されている神の「絶対的」存在においては不可能なのである。三つの「形態」が互いに区別され「相互外在的」に現れてくる「過程」の「現象」において初めて神は自分を「その存在の全完全性において」(2-3-277)「認識」しうようになるのである。

IV

1.

前節においては神が「絶対的」存在に止まるか別の存在つまり「過程」を定立するかについて完全に「自由」であり、それ故それを定立するしないは神の単なる「意志」に依存していることが確認された。ところが神は「過程」の可能性を単なる可能性のままにとどめておかなかった(2-3-303-304)。しかし、とシェリングはいう、神が「盲目的に」行為へと駆り立てられるということは考えられない限り「過程」を定立したとなればそこには何らかの「動機」がなければならない(2-3-271)。

しかし神は自分自身のために「過程」を定立したのではない、また仮にそうしようとしても「過程」は神にとっては何も「成果がない(ohne Resultat)」(2-3-277)が故に、神は自分自身のために「過程」を定立することはできない。このことは次の二重の観点から確認される。第一に神がその存在の在り方に全く影響されることなく三つの「形態」の「統一性」として存立し続けるものであることは既に見た。それ故「過程」の定立によって神の存在の在り方が、つまり「絶対的」存在が「過程」に、そして直接に所有しているのではない媒介された「絶対的」存在へ変化するとはいえても、神そのものが変化したということはできない。その限り「過程」の定立によっても神は神のままであり、この意味で神にとっては何ら新たなことは生じていないといえることができる(2-3-271)。第二に神は「過程」の「現象」において自分を「その存在の全完全性において」予め「認識」していた。それ故「過程」を定立したとしてもそこには神にとって何か新しいこと、つまり神が予め「認識」していたのでないことは何も生じないといえることができ

る(2-3-277, 286)。この二重の観点において「過程」定立が神にとって「成果がない」ということから、「過程」の(その外観はどうであれ)本質が、神が己の「絶対的」存在を媒介されたものとするために定立した「神産出の過程(theogonischer Proceß)」でも、自分をその存在の全契機において「認識」するために定立した神の自己「認識」の「過程」でもないことが明らかになる。

それ故神は自分以外のもののために「過程」を定立したのであり、神がそれのために「過程」を定立した自分以外のものとは「過程」を定立することによってのみ生ずるその本来的「成果」でなければならない(2-3-277)。しかしそのようなものは「意識」以外にはない。つまり「過程」においては自分の外に出て「存在すべきでないもの」となった神の「絶対的」存在の第一の「形態」が自分の内に還帰するが「再び自分自身の内に連れ戻される自分の外に存在しているものは、しかしまさにそれ故に自分自身へ到来したもの、自分自身を意識しているもの」(2-3-287)なのである。しかし「過程」は「人間(最高にして最後の被造物としての)」において自分自身を意識しているものの段階的な自己到来(ibid.)として定立された。もちろん神にとっては、自分の存在については既に「認識」しているのだから、この「自己到来」が無媒介なものであっても構わない、つまりあらためて現実に区別してみる必要はない(2-3-286)。しかし神の「意図」はこの「自己到来」を媒介項を持った段階的なものとすることによって、神の存在の全契機を「単に区別されうる」ものとしてではなく「現実に区別され、個別に感じられた」ものとして「意識」の内に流れ込むようにし、このようなかたちで自分以外に神の存在の全契機を知っているような「意識」を作り上げることにあったのである(2-3-287, 304)。しかし「現実に区別された」神の存在の諸契機とは具体的にはこの「過程」を通して産出される「被造物」を意味している。それ故ここに「過程」の本質が、その内に神の存在の全契機が「現実に区別され、個別に感じられた」ものとして統一されている「意識」を産み出すために定立された「創造の過程(Schöpfungsproceß)」として明らかになるのである。

2.

神は己が定立した「創造の過程」における「原因の原因」(2-3-292)となる。無論この語は神が今や「存在すべきでないもの」「存在しなければならないもの」「存在すべきもの」となった神の「絶対的」存在の三つの「形態」の「前・超物質的統一性」であることを意味するものに他ならない。三つの「形態」の「不和」においてもそれらの

「統一性」であり続けることによって存在における三つの「形態」の「統一性」を強制するということは、ここでは神が各々異なったことを意志する「不和」における三つの「形態」を一つのことに協同せしめ、「それらの超物質的原因がそれ自身（統一性）であるところの過程の物質的諸原因」たらしめることを意味する（2-3-280）。このとき神は二つの側面、つまり神は三つの「形態」が個別になしていることを自ら行っているわけではないという側面としかしそれらを一つのことに協同せしめているのはやはり神であるという側面を併せ持っているということが出来る。このことに着目するならば、確かに神は「過程」の外にとどまり、決して「過程」の内に身を投ずることがないといいうるとともに（2-3-292）、それにもかかわらずやはり神は「過程」における一切を支配している「意志」なのである（2-3-290）。

「存在すべきでないもの」「存在しなければならないもの」「存在すべきもの」はこの「過程」の三つの「物質的原因」となる（2-3-279）。第一のものはこの「過程」のきっかけを与えるもの、「この過程の誘因」（*ibid.*）であると同時に「過程」においては、あくまで「存在すべきでないもの」として存立し続けようとする「意志」として「克服の対象、そしてそれ故全過程の基体、ヒュポケイメノン」（2-3-289）となる。他方「存在しなければならないもの」はただひたすら「存在すべきでないもの」を「潜勢」の状態に連れ戻そうとする「意志」として「過程」における「動力因」となる（2-3-279, 289）。しかし「存在すべきもの」は「その単なる意欲によって本来的な活動無しに各々の生成物をその段階において保持するもの」もしくは「過程の間、それによって過程の諸段階が規定される運動の制御力 *vis moderatrix* であり、各々の段階に停止を命じ、その結果現実に異なり、区別可能な諸契機が存立するようになる力」であるとされる（2-3-289）。このことは「存在すべきもの」が無条件的に自分の「意志」を貫こうとする他の二つの「原因」を自らの下に服さしめている高次の「原因」であることを意味している。つまりそれは「存在すべきでないもの」には「存在しなければならないもの」による「潜勢」の「変様」を受け入れるように命じ、また「存在しなければならないもの」には「存在すべきでないもの」を一定程度以上に克服しないように命ずることによって「存在すべきでないもの」の段階的な克服を可能にするものなのである。しかしこの第三の「原因」は「存在すべきもの」として「過程」の「目的因」でもある（2-3-279）。つまり「存在すべきもの」の制御の下に「存在すべきでないもの」は「存在しなければならないもの」によって各瞬間に一定の程度「潜勢」の状態に定立される。しかし既に見たように「存

在すべきでないもの」は自分の代わりに「存在すべきもの」を定立することなしには「潛勢」の状態に連れ戻されることはできない。つまり「潛勢」の状態に連れ戻される「存在すべきもの」とは同時に自分の代わりに各瞬間に一定の程度「存在すべきもの」を定立するものなのである。その限り「存在すべきもの」は「存在すべきでないもの」にとってはその「自己到来」の運動の「目標」であると、つまりそれは「克服された意志にとって全過程の間目標として（手本、*exemplar*として）前に漂っているものであり、このものにおいて克服された意志は言わば自分が範とするものを持ち、そして自分のうちに表現しようとするものを持つ」（2-3-288）ということができるのである。

しかしこのことから「被造物」が神の「絶対的」存在と同様に三つの「形態」を持つものとして産出されることが理解される。というのは「存在すべきでないもの」が「存在しなければならないもの」によって各瞬間に一定の程度「潛勢」の状態に定立されるということは、同時に「存在しなければならないもの」がこの「変様」において各瞬間に一定の程度自分を実現することを、さらに各瞬間に一定の程度「存在すべきもの」が定立されることを意味しているからである。このようにして「存在すべきでないもの」を「基体」としてその克服の程度に応じて、そこにおいて根源的「統一性」が回復される「人間の意識」にまで至る、「最高の統一性の模像（*Abbildung der höchsten Einheit*）」（*ibid.*）の系列が産出されるのである。

シェリングの世界創造論は以上のような概要を持つ。この叙述を回顧してみるならば我々は彼が「自然過程」を神の存在から、つまりたとえばその三つの原理を神の存在を構成する三つの契機から、またその所産である「被造物」の構造を神の存在の構造から、それぞれをその根源から把握しなおしているのを見て取ることができる。我々はこの世界創造論のうちに「自然過程」がシェリングにとって根源的にはどのようなものであったのかを見て取ることができ、この意味においてそれを彼の「自然哲学」の最終的な根拠づけと見なしうるのである。

※引用等はすべて F.W.J. Schellings *sämtliche Werke*. Hrsg.v. K.F.A. Schelling. Stuttgart-Augsburg 1856-61. によるものである。また括弧内の数字はそれぞれ部、巻、頁数を意味している

〔西哲史 博士課程〕

Gott und Naturprozeß bei Schelling

Kouki ASANUMA

Schelling hat die Naturphilosophie oder die Darstellung des Naturprozesses als ein Teil seines Systems von Jugend an bis zum seinen Tode aufbewahrt. Diese Naturphilosophie hat ihren Grund nicht in sich, sondern außer sich, d.h. in dem , unvordenklichen ‘ Sein des Gottes. Aber Schelling entwickelte seine Gotteslehre in ihrem ganzen Umfang erst in dem letzten Phase seiner Philosophie, nämlich in der , positiven ‘ Philosophie. In dieser wird der Naturprozeß nicht als solcher, sondern als der Schöpfungsprozeß, den Gott gesetzt hat, um das Geschöpf zu schaffen, dargestellt. Durch diese Darstellung des Naturprozesses als Schöpfungsprozesses erhält die Naturphilosophie ihre Grundlage.

In diesem Aufsatz sehe ich die Schöpfungslehre in der positiven Philosophie für die letzte Begründung der Naturphilosophie an und versuche das Gesicht des Naturprozesses als Schöpfungsprozesses, das innerhalb der Naturphilosophie selbst verborgen bleibt, anhand der Schöpfungslehre in *Philosophie der Offenbarung* ans Licht zu bringen.